

## 中国における日本語教育の重要な課題 ——ハイレベルの日本語通訳人材の育成について——

李 若柏

中日国交回復してからの33年、両国間の交流は史上最大規模で展開している。日増しに増えるニーズに応じて、日本語教育の規模が大きくなる一方である。中国日本語教育研究学会の統計によると一昨年までは中国全国の日本語学科は150前後だったが、今年は250を上回っている。急速に発展している日本語教育の中で、初級、中級の人材は数多く育成されているが、今後の中日間の協議、会議、各種の人的交流を円滑に推進するためには、ハイレベルの語学能力と専門知識を有する中日通訳者の育成が急務になっている。しかし、実践的理論、トレーニング方法を盛り込んだ中日通訳の教材や、育成方法、成功した経験はまだかなり乏しいと言ってよいだろう。中国大学日本語専攻の教育体系の中で、中日通訳の課程は比較的不足しており、ハイレベルの通訳人材の育成は我が国の日本語教育改革の重要な課題となっている。

本稿は古代から今日までの中日通訳の歴史を断面的に回顧し、中日通訳者育成の問題点を述べた上で、とくに「大場面」の通訳の重要性を強調して、ハイレベルの中日通訳者育成対策を探りたいものである。

### 一、中日文化交流史における日本語通訳の事情

古代において、中国はかつてアジア地域における政治と文化の大国で、中国は即ち世界文明の中心で、周りの異民族を「蛮夷」と見なしていた。朝貢制度は古くから漢民族中心の政権と周辺少数民族及び近隣諸国との関係を決定しており、支配的であった。よその民族あるいは国家は中国中央政権に臣服して、朝貢にやってくる。『三国志』倭人伝の中に「今使訳所通三十国」との記載があり、その「使」は即ち倭国が周辺地域と国家に派遣した正式及び非正式の官吏、使臣と貿易関係の者で、中国に派遣されてくる者も当然ながら含まれているはずである。「訳」はその使臣の通訳であろう。これが史書にあった中日間通訳の最初の記載である。当時、中国が文化と政治の上位国であったので、中国人は少数民族と外国の言葉を勉強して通訳するのではなく、よそから来た使者が中国語を勉強して、通訳に当てられた。中日間の通訳を担当していたのは、中国戦国時代以後から秦漢、魏晉に至って戦乱を逃れるために朝鮮半島を通じて日本に流れていった帰化人であった。<sup>[1]</sup> 唐の時代になると中日文化交流は繁栄期を迎えた。日本から遣唐使が派遣されてきて、その中に「訳語」という通訳が同行していた。

明朝は中国の再統一を果たすと、積極的に外国と交流し、少数民族と外国との交流を処理する機関として、「四夷館」と「会同館」を設けた。四夷館は主に公文書の翻訳を扱っており、会同館は賓客の宿泊や通訳を手配する部門で、今日の「礼賓司」か「外事弁」の役目を担当していた。蔣垂東の調査によると、明の時代に、中国史上初めて中国側が通訳の手配をした。

遣明使の日記である『策彦和尚再渡集』には、日本の通事として「温、胡、褚、楊」四名の人物が登場する……四夷館が「訳其文字」、即ち外交文書の翻訳を担当する訳字生を育成するのに対して、会同館では「訳其語音」、即ち外来使者の折衝、皇帝謁見時の案内、送迎などを行うための通事（通訳官）を養成するべく、会話中心の外国語教育が行われていた。会同館において日本語教育が本格的に行われるようになったのは、会同館が礼部から兵部の所属となった弘治五年（1492）以後と考えられている。<sup>[2]</sup>

蔣垂東が明朝の典籍と日本人学者の研究を援用した調査で、中国が日本語通訳人材の育成は明朝弘治五年（1492）に始まり、同時に「中国における日本語教育の歴史は清朝末期に始まったと考えられてきた」従来の見方を覆して、「中国における日本語教育の歴史は明代に遡ることができる」と指摘し、注目すべき意義があると思う。

1862年に設置された京師同文館は中国近代外国語教育の開始となっている。しかし、当時、日本との交流が少なく、事務処理の必要がないので、日本語科は置かれなかった。「東文館」は1897年に始めて設けられ、「唐家楨は光緒14年（1888）に京師同文館に設置された翻訳処の最初の東文翻訳官であり、東文館の初代東文教習であることが確認できた。」<sup>[3]</sup>王宝平の調査によると、1871年に中日の間に結ばれた修好条約の第六条に「此後両国往復する公文、大清は漢文を用い、大日本は日本文を用い漢訳文を副うべし。或は只漢文のみを用い其便に従う」ように規定され、日本にとっては不平等のようだが、「実は清末の中国における外国語人材不足に由来したものにすぎない。つまり日本語のできる人材が皆無に近い現状を鑑みて、やむを得ずこのような不平等な内容を条文に盛り込まれたのである。」<sup>[4]</sup>

清朝駐日初代公使の何如璋は1877年に日本に赴任した際、英語の通訳を同行させ、また現地で日本語の通事を臨時に雇い、仕事の不便から日本語通訳養成の必要性を唱えた。「何如璋の日本語人材の養成計画を具体的に実現させたのは1882年2月に着任した二代公使黎庶昌である。即ち清国公使館内において三年を上限として、日本通商入口の翻訳人員の用の為に、東文翻訳学生を招致し、光緒八年（1882）九月に開館したのである。」<sup>[5]</sup>王宝平の研究で明らかになったのは、中国近代日本語教育は中日間外交の必要による通訳の養成から始まり、日本の清朝駐在公使館の中において、1882年に開始したのである。

中華人民共和国が成立してから、冷戦のため、中日両国の交流は長く断絶していたが、1952年4月、モスクワで開催された国際経済会議中、中国の代表が日本代表と接触し、訪中

の招きをした。日本社会党の衆議員の帆足計、参議員の高良富らが訪中を執行し、1952年5月15日、新中国が成立してから最初の日本人が北京西苑空港に到着した。中国側の接待を担当していた孫平化の回想によると「飛行機に乗って長年使わなかった日本語で挨拶をすると、相手は分からない顔をしていた。翼朝鼎が流暢な英語で、友有りて遠方より来る、またと楽しからずやと言ったら、お客さんは大いに喜んだ。」<sup>[6]</sup>新中国が成立した後の、最初の中日交流は英語で行われた。1972年、中日国交正常化の後、中国の日本語教育は日増しに盛んになり、両国間交流の架け橋となっていた。

## 二、ハイレベルの通訳を育成するには

新中国が成立後、とくに70年代末期から中国の日本語教育が次第に軌道に乗り、体系化してきた。中日通訳者育成の面から見れば、その重要性が認められ、日本語教育のカリキュラムに組み込まれるようになった。1986年、国家教育委員会の許可を受けて、北京外国語学院の「訳訓部」に「翻訳、通訳理論と実践」の修士課程が設けられた。2003年、日本政府の草の根無償協力資金として、北京言語大学は日本の援助を受け、同時通訳に不可欠なブース6台など各種装置を購入して、日本語と中国語の同時通訳者の養成を目指した大学院コースが開設された。教授陣には日本の中国語同時通訳教授法の第一人者である神田外国語大学の塚本慶一教授や、中日友好協会理事、中日通訳の大先輩である林国本先生、北京外国語大学北京日本学研究中心教授の郭連友先生らが加わった。これは今まで設備と教師陣の両面が最も充実した中国における中日同時通訳の大本山であり、その育成の経験などは大いに期待されている。しかし、上記の恵まれている名門校以外に、中日通訳者の育成にはまだ若干問題点があると言わねばならない。

まず、外国語ができれば、当然通訳もできるという執念は根強く存在しているようである。そのため、長期にわたって、通訳の方法の検討や、通訳授業の教育実践は重要視されておらず、立派な通訳者は人工的に育成した産物より、自然発生的な者が多いのであろう。そして、今まで、通訳の教材は数多く出版されているが、筆者が見た限り、初級的なものは通訳の教材というより、普通の会話程度にとどまる。中、上級の通訳教材には、「同時通訳」というものは多いが、しかし、中身は同時通訳と逐次通訳の混同が見られる。「同時通訳」の要点は「同時」にあると思う。話者の話が始めると通訳者がすぐ通訳を始めなければならない。通訳者が必ずしも話者と同じ場にいるのではなく、裏舞台のブースを利用するのが普通である。現在、「同時通訳」の講義がトレーニングと称しながら、その多くは逐次通訳である。「逐次通訳」と「同時通訳」は二つの次元の仕事であり、同時通訳は通訳の最上級で、重要な式典や会議などに用いられ、普通、専門的なトレーニングと長期の経験の積み重ねが必要となる。

逐次通訳は場面によって「小場面」、「中場面」、「大場面」とに分類すべきなのではないかと思う。この分類は、意味が分からない場合、聞きそこなった場合、相手の話しを途中で中断させて、質問することは可能かどうか、そして、聞き取れない場合は、相手に再度話してもらうことが可能かどうかによる。第二は普段の会話体と丁寧語の使い分けによる。小場面とは、例えば、旅行社のガイドをして、2、3人の日本人の旅行者を迎えて、案内する。この場合は初級段階の日本語ができれば大体勤まる。中場面とは、小規模の旅行団やテーブルぐらゐの宴会、打ち合わせなどの場合である。小場面と比べれば、やや正式になるが、やはり分からない内容が出ると話者に聞いて、確認することができる。

小場面と中場面の通訳はとくに通訳の講義とトレーニングを受けなくてもできるが、大場面となると局面はまったく異なってくる。大場面とは正式な式典、学術会議などの場合を指す。大場面の通訳はまず丁寧語、謙譲語、尊敬語が頻繁に使われ、普段の会話体と違った硬い講演体が用いられる。話の中に敬語の決まり文句、パターンがよく出る。これらの文型とパターンは普段あまり使われず、教材にもめったに出ないもので、中国人の学生が一番困る。その上、小場面、中場面とは違って、話者の話が分からない、或は聞き取れなくても、途中で中断させて、もう一度話してもらうことができない。それゆえ、大場面の通訳は逐次通訳の中で一番難しく、特別な訓練を受けなければならない。

前述したように、小場面と中場面の通訳は中級ぐらゐの日本語を勉強すればできる。同時通訳は極上級のもので、北京、上海、広州などの大都会や経済発展が進んでいる沿海地方以外にあまり使われない。それに専門的な訓練を受けるには、特別な機械設備と経験豊かな講師が必要で、普通の大学はできないのである。従って、筆者は現在、中国の大学日本語科において中日通訳者育成の重点はこの「大場面」に置くべきだと特に強調したい。

日本語科の学生に極簡単そうなセンテンス、たとえば、まず「大会现在开始，下面请××校长讲话、」などを学生に宛てて通訳させる場合は、大体「大会を今から始めます。まず、××校長、話してください」とか、「××先生お話をどうぞ」とか、体裁を得た通訳はめったに出なかった。「校長」と「学長」との区別がつかない上に、「××学長にご挨拶をお願いします、」とか、「××よりご挨拶を申し上げます」のような内と外の待遇表現に気を配る余裕はなかった。これは単なる学生が日本語をまだものにしていない表れだけではなく、若い教師や院生にやらせても同じ様子である。問題はやはりこの大場面の話に普段触れたことは少なく、不慣れのせいだと思う。プロの通訳者であるかでないかにかかわらず、急に大場面の通訳か、話しに引っ張られることがあり、平日の準備がないとだれでもあがってしまうだろう。

中国は急速に市場化を推進し、日本語科の卒業生が政府役所、中日合弁企業、日系企業に入る。今の状態では我々日本語教育者が務めをまっとうしたとは言い難く、優秀な中日通訳者の育成は現在の日本語教育システムの弱い一環である。2002年6月7日の『長春晩報』は「同

時通訳、毎日500百ドル」という見出し語で、同時通訳人材の不足及び待遇のよさを報道した。今年2月大連の某新聞は「ハイレベルの日本語通訳の人材は依然足りない」というタイトルの文章で、「大連目前日语培训百分之八十都停留在低端, 高端日语人才的匮乏将会持续几年时间。这给大連日语培训学校带来商机, 也向大連高等日语教育提出挑战。」大連だけではなく、全国もこのような局面ではなかろうか。中国日本語教育改革の突破口を見つけることができればと思っ、本研究をしているところである。

**注:**

- [1]徐冰「中日間通訳の歴史」『日本語学習と研究』2002年2期、45頁
- [2]蔣垂東「明朝の日本語教育について」、『日本語文化研究』、北京大学
- [3]王宝平『清朝の档案から見た東文学堂—その歴史的変遷を中心—』『四天王寺国際仏教大  
学紀要』、人文社会部34号、短期大学部42号、2003年3月、第7頁
- [4]前掲論文、第2頁
- [5]前掲論文、第3頁
- [6]孫平化『中日友好随想録』、世界知識出版社、1986、第4頁

東北師範大学  
中国赴日本国留学予備学校  
校長 李 若柏